

ひかりのよる

私立南山高等学校女子部 二年

加藤 優 羽

光が、二つの体に沿って流れるシーツの上に柔らかかに落ちていた。起き抜けの微睡んだ視界では世界全体がやや白く発光している。その白さの中で、まるで羊水の中で漂うように全てが弛緩して、私は緩やかに目を覚ました。

あさ。この惑星の、どこまでも幸福な、朝。

口を薄く開いて、その二文字を無音の中でなぞってみる。あさ、あさ。言い間違えたり詰まったりして壊してしまわないように、花びらが落ちるようなやささで。

光がシーツの上でちらちらと動いて、身じろぎをしたあなたは目を閉じたまま、レイ、と呟いた。今日この部屋に最初に響いたのは私の名前だった。そのことに呆然として狼狽える。それに報いるようなものを私はあなたにあげられない。それなのにあなたは何も疑わずに目を閉じているから。せめて、私が持っている中で一番やさしい言葉と声でああなたに言った。

おはよう、フィユ。

あなたはゆっくりと目を開ける。

顔を洗い下に降りると、テーブルにいつものように朝食が用意されていた。柄の長いスプーンでかき混ぜると光の破片が底に沈んでいるのが波紋にきらきらと浮いて、銀河のように渦巻く。今日はすこし多めに光を溶かしたんだよ、と前からまだ眠そうな声が私に促した。あなたはテーブルの向こうでまた微睡んでいる。円く開放された窓を背にして椅子の背に深く凭れ、目を閉じて聴き入るように光の飛沫しぶきを浴びて。

たぼん。水底に深く沈めて、掬い上げた。歯を水面に静かに当て、ゆっくりと銀色の楕円を傾ける。光が喉を伝わって、胃に落ちて。

「おいしい」

ありがとうと言うと、よかった、とあなたは微笑んで、囁くような密やかさで朝をもう一度祝った。

おはよう、レイ。

私もそれに応えて、もう一度同じ言葉を繰り返す。

私たちは光の中で、顔を見合わせて静かに笑った。

この惑星は光の星だ。

ドアを開けると、柔らかく靴の裏を押し返してくる感触と一面の彩度の高さに目が冴えた。グラスグリーンのその植物は清涼な香気を朝の空気に漂わせて、真っ白に構成された道と道の間で揺れている。

世界は光に満ちて、降り注ぐ日射しに照らされた白い道が真っ直ぐに伸び白い建物に続いていく。ミルクっぽい麻の色、紙のようななびつきとしたオフホワイト、砂っぽいアイボリー。見渡す限りは白とグラスグリーンの美しい二色。人々の服装の色彩も、同化するような白色だ。個性を主張するよりも風景や隣人に調和することを心地よく思うこの星の住民らしい。前へ行くあなたが手を差し出してきたので、ぎゅっと握っ

て道の上へ一歩踏み出した。

「レイ、だいじょうぶ？」

あなたは髪をふわりと靡かせて、ゆっくり行こうね、と手を引く。私は被ったフードを少しずらして、大丈夫だよと答える。

「この星の朝、すごく好き」

あなたはそんなちっぽけな言葉に、これ以上ないぐらい幸福そうに笑って見せた。

「ねえレイ、この星には慣れた？」

「慣れた、のかな。まだ分らない」

白い髪と肌をして柔らかい光の中で笑うこの星の住人は、受けた光をその体に溜めて淡く発光している。目は薄く透き通ったスノウグレイで、ちらちらと燃える燐光がいつも瞳の奥にある。あの星とこの星は、別の星だとは思えない程何もかもがよく似ている。でもそれは似ているというだけでまるで違う。あなたと手を繋げても、私の手は光っていないみたい。

「だいじょうぶだよ」

遠くなんかないよ。なんにも、変わらないよ。あなたが繋いだ手をゆらゆら揺らすのを眺めて、そうかな、と返した。

この星に住むあなたは、光のある世界しか知らない。

「なんかまだ嘘みたいだ、この星に私がいること」

こんなに幸せでいいのかな、フィユ。

するとあなたは不思議そうに首を傾げた。

「この世界には幸せにならなきゃいけない人しかいないんだよ」

あたりまえのことだよ。ね、と私に笑いかけ、それ以外の答えなんか存在しないかのように私のフードの中に真っ直ぐ手を伸ばした。

「そうだね」

私も微かに笑い返して、呟くように答えた。さっきまで陰になっていたフードの中で、光の粒子が舞う。あなたの白い手が、仄かな光を放って私の頬に触れる。ちかちかと煌く瞳を愛おしそうに細めて、あなたは私の瞳を射抜いて。

眩しい。

口に出た言葉にフィユは一瞬きよんとした顔をして、慌てて離れて私のフードをぐいと押し下げた。

「またやっちゃった、ごめんねレイ」

マブシイって、痛い？

フードの付いた外套の上から更に抱きしめて光を遮る過保護さが可笑しい。

「ううん、反射で口から出ちゃっただけ。全然何ともないよ、フィユ」
肌に触れる生地が、地球のどの材質とも掛け離れた質感でさらさらと髪に擦れる。また陰に戻ったフードの中で目を閉じた。瞼の裏で君が放った光がまだきらきらと点滅している。

レイ。あなたが不意に名前を呼び、そのまま後ろに身を投げるように体の力を抜いた。引っ張られて私も被さるよう倒れ込み、あなたの隣に仰向けに落ちる。体は若草に柔らかく受けとめられ、薄荷のような胸のすく匂いが鼻腔をくすぐった。

「ごめんね、急に引っ張って。ちょっと休憩してこう？ 少しぐらい遅れてもいいよ」

いいのかな、と口では控えめに反論したけれど背中当たる芝の感触が心地よくて体の力が抜けていく。

押し当てた片耳から、誰かの呼吸が伝わってくる。手足を広げ切って、光を体中で反射させている人。胎児のように体を丸め、光に埋もれるよ

うに眠る人。グラスグリーンの海で、人々は光だけに意識を集中させて目を閉じている。

知らない人と背中合わせでもこの星の人は全く気にしない。道の真横だろうが、出勤途中だろうが簡単に体を投げ出すのには最初抵抗があったけれど、あなたが繋いだ手の感触を確かめて幸せそうに笑うから、次第にどうでもよくなった。ひやひやとした草の青い匂いが徐々に体に馴染んで温くなり、肌との境界が曖昧になっていく。繋いだ手はもうとっくに体温が同じになっていて、あなたの手から力が抜けても重なり合っていた。

あなたの寝顔を見ながら考える。きつとこの星はあの星より酸素の濃度がほんの少しだけ高いのだろう。ちよつとだけ重力が小さいのだろう。一歩も起き上がれないぐらい怠くて勝手にぼろぼろ涙が出ることも、心臓が痛んで酸素が足りなくなることもしない。

あの惑星で私は上手く息が出来なかった。
朝も昼も、あの星では全部夜だった。

胸元を掴んで心音の間隔を確かめて、光の中、と何度も声に出さずに呟く。合わせた二つの掌で出来た空間はあなたから放たれる仄かな光を包んでいる。当然のことだけれど、あなたは目を閉じていて。そんな些細なことに少し不安になって、あなたがここにいることを確かめるように指先に力を込めようとした。

その瞬間に、指がかたかたと震えだす。
腕を押さえて薄く息を吐き、あなたを起こさないように絡まった指をそつと解く。何度となく繰り返し返した失望に目を閉じて意識を手放した。

ほらフィユ、やっぱりどうしようもないくらいに遠い。あなたと私は何億光年離れているんだらう。

あの星に慣れ親しんだ私は、この星の光すらもこわい。

優しすぎて、眩しい。

着いた先はあの星でいう会社のような学校のような場所。

フィユのようなまだ学生に見える人たちも各々の仕事を持ち、大人の事をセンセイ、と呼んではたばたとフロアを動き回っている。少し離れたスペースでは、まるで授業のように子供達が自分より幼い者に読み書きを教えていた。お昼寝をする赤子の横でそのお腹に毛布をかけながら打ち込んだデータを捌く大人、窓際では光を繕り合わせた糸の玉で編み物をする老婦に、手記の推敲をする老父。青年たちは車座になって、雑談をしながら器用に手の中の工具を操り螺子や小さな歯車を無数に組み合わせていた。思い思いの時間を緩やかに共有して、創られたものたちはそれを必要とする人のところに届けられる。素朴で洗練されたシステムは、惑星が回るように社会を循環している。しばらく待つと、フロアの奥に話しに行っていたフィユが戻ってきた。

「わたし、ライトボトルが足りてないそうだから今日はそれやろうかな。レイはどうする？」

「気にしないで、その間は適当に暇つぶししてるよ。何か手伝えることがあったらやりたいけど」

「んー、じゃあわたしが起きたら前みたいに箱詰め手伝ってもらおうかな」

「わかったよ。じゃ、おやすみ」

おやすみ、と言ってあなたは目を閉じた。

まるで柔らかな羽を敷き詰めて創られた鳥の巣のように、幾層もの白い毛布の上にフィユは体を丸めた。両手に収まるくらいの瓶を抱え込むように包んでいて、胸が呼吸に合わせて微かに上下している他にはびく

りとも動かない。それは手の中の瓶に糸を紡ぐ繭のようにも見えた。フロアのあちこちに静謐な白い塊は点在していて、その空間だけ時が止まったようだ。

あなたは、光を自在に操ることができる。

この星でのそれはあの星での絵が上手いというようありふれた特技だ。それでもあなたが指先に光を戯れさせて遊ぶ様子とか、あなたが光を煮詰めたスープを飲むと体が中からじんわり照らされるような感覚がすることとかは私にはやっぱり不思議で、ああなただか尊いな、つてそんな感想をそういうことを見つける度に抱く。

息を殺して、あなたの手の中に光が集まっていくのを見つめた。対流するような光の渦が出来たかと思えば風いで、繰り返して、次第に光が明度を上げていくのが分かる。とろりとした蜂蜜のようにも、透き通った氷が徐々に結晶していくようにも瓶の中に光が溜まっていく。それは目を焼くようなあの星の日射しとは似ても似つかず、どこまでも穏やかなこの星の光。ただ目を奪われて、他の事がどうでもよくなってしまつて。フィユ、うつくしいね。あなたはほんとうに、うつくしいね。

でもその美しさが、私には。

フードを目深に被って、あなたの横から音を立てずに離れる。引き寄せられそうになる視線を無理矢理外して踵を返した。明滅する思考が魚群のように頭を回る。銀色の魚の腹が無数に鱗の裏にちらついて、鈍くこめかみが痛んだ。少しの間一人になって症状を落ち着かせようと、足早にフロアを抜ける。大丈夫、とあなたの言葉を繰り返して、視界に映る景色を流していく。遮光性のフードで他人の視線も自分の視界も遮つて。遠くなんてない、大丈夫。繰り返し繰り返し聞かせて。

なのに、足音が。

その眩きに混じって響く自分の足音が、何でもないようなその反響の

仕方が、この星はどうしようもないくらいどこか違って。どこまでも違って。

足元の不確かさに脳裏が眩んで目を閉じると、ぶわっ、何度となく繰り返した感覚が襲ってきた。また、まだ、あのほし。そう喉の奥で呟いたと同時に完全に意識が飛んだ。

その日特に何かがあったわけじゃない。でも不意に、あ、もう、飽和量だ。そう思ったのだ。今まで重ねてきた毎日が緩やかに私の中に沈殿していき、それがついに溢れだしそうになったようで脳がたぶたと揺れていた。

ふらふらと毎朝スカートの頼りなさを押し殺して、リボンで首を締め、死にそうな顔で笑っていた。教室のクラスメイト達が羨ましくて、部屋で蹲る独りも怖くて、息苦しさをゆっくり息を吐くことで遣り過した。

ただ、一人で。

ただただ、独りで。

それだけ。

ほんやりとした寂しさと虚無感、吐き気によく似た不安感。見て見ぬ振り続けたそれらが、気づいたらいつのまにか堆うたかかたまっていて。

気づけば私は夜になるとまともに息ができなくなっていた。

「別に、自分が恵まれてないなんて思っていない」

呟いてゆつくりと息をする。優しい両親は事故で亡くなった。でも叔父と叔母が生活をきちんと保障してくれている。いじめや何かで虐げられていたわけでもなく、話す相手もいるし班決めでも笑って適当な相手と組める。十分、私は与えられている。

でも、私じゃないな、とふとした折に気づくのだ。叔母さんの一番は

私じゃないな。あなたの一番は私じゃないな。それは目を見れば明白で、私は早々にその視線に堪えきれなくなった。

大事にしている誰かに大事にされている人には、わからない。あなたには、何があってもその人がいるから大丈夫でしょう。そして、大体の人がそういう人を一人は見つけて生きているんだ。世界からの圧倒的な無関心を、一人じゃないけど独りだっただけで感覚を、きつと想像もできない幸運な人達。

夜になるとぐるぐると不安が回って。黒で塗り潰されそうになって。

「駄目だっけ分かってる」

世界に一人きりで、それがどうした。夜になると過呼吸で倒れるなんて、迷惑もいところだ。

駄目だっけ、分かってるんだ、だから。

ベランダへ続く窓を開けて、裸足で冷えた床を踏んだ。吸い込んだ空気の冷たさが少し気持ちよくて安堵して、まだ大丈夫だ、と思った瞬間に脂汗がだらりと伝って視線を上げることができないのに気づく。

ちよつとずつ溜まっていたものは、もうぎりぎりだったようで。張り詰めた水面には、もうあと一滴分の余地しかなくて。

今日が星の無い夜だったら、月がビルに隠れていたら。そんなことで、どうにかなくてしまいたいところまで来た。

頭が揺らされる感覚。波のような吐き気。過度に繰り返す呼吸。

ああ、やつぱり、私、駄目だ。

金魚みたいに間抜けに口をぱくぱくさせて、ずるりと柵に手を這わせてへたり込んだ。

その瞬間、床に膝を着いたはずがむしろ体が浮き上がるような異様な感覚がして、意識がぐらりと傾いだ。

「きれい」

見たことも無いような一面の光。

目の前のあなたは私を見て、ただそれだけを言った。瞬きしている間に現れた違う星の私に、警戒も驚嘆も忘れたかのように。

綺麗だね、と私の瞳に見惚れた。

あの時、その言葉がどれだけ私の心臓を刺したか。

フィユ、前の星では誰も私のことを見なかったんだよ。

ましてや綺麗だとか、そういうのなんて、欲しくて堪らなかったけれど信じられないくらい遠かったんだよ。

そんな言葉知らなくて、思わず思い切り目を逸らした。過呼吸はまだ収まらなくて、ぎゅつと目を瞑る。するとあなたは驚いて何か言おうとして、迷った末におずおずと私を抱き締めた。

速まった拍動があなたの心音と徐々に同じになっていくのが分かって。初めて会う他人に、優しくされたのにそれを突き返すような他人に。急に触れてごめんね、辛そうだから。あなたはそれだけ言って、黙って背中をさすった。何も答えない私のことをあなたが急かさないので余計焦って、嗚咽を無理矢理止めようとして。

「いいよ」

ないて、いいよ。わりしなくて、いいよ。わたし、あなたを見た瞬間に、綺麗だな、知りたいな、って思ったんだ。

ねえ、名前を聞いてもいい？

わたしまだあなたのこと何にも分からない。何処から来たのかも、何でかなしいのかも。

ゆっくり、ゆっくり、教えてほしいんだ。

着ていたフード付きの外套を脱いで私に被せ、あなたは言った。その

言葉に私の中の積みあがったものとかが全部すとんと崩れていくのが分かった。あなたがそのままの意味で言った、他の意味などない台詞でもいいよ、とか。そんな単純な肯定を。

ここにいていいよ、って一言をずっと探してたんだ。

「はい、おつかれさまです。みんな、今日は帰りましょう」

そう大人の誰かが呼び掛けるとばたばたとオフィスが俄かに活気づいて、次第に一つ一つ灯りが消える様に静かになった。帰ろ、とあなたの手が差し出されるのを待ってそれに応える。

外に出た瞬間にあ、と声が漏れて、フィユがどうしたのと首を傾げる。

「ううん、何でも。明るいのに、まだ慣れなくて」

あの星でいう夜の時間帯にも関わらず、外はぼんやりと薄明るい。

この星に夜という言葉はない。たぶんこれがあの星との最大の違いで、一日が終わり人々が眠りにつく時もこの星は光に包まれている。光は早朝よりも弱まるが、植物が早朝に蓄光した分を放散したりして釣り合いが取られているようだ。草を踏むとその刺激に呼応して発光が強まり、光る足跡が後ろに残っていく。時折振り返って、草原に浮かび上がる幻想的な景色を眺める。この星は常に昼で。独りの人は何処にもいない。

「レイの惑星には、ヨルがあるんだっけ？」

「そうだよ」

戻れるといいね、と言ったフィユに曖昧に笑いかけて、街の様子を目で追った。

空を白いレースで覆って、射し込む光を濾しているような。月光に似た青白い温度がたばんと街中に満たされているような感覚。建造物が全

て白いのは光を反射するようになるのだと、あなたが教えてくれた。

「ねえ、ヨルは何色をしているの？」

「真っ黒。白の、反対」

実はこの星では見たことが無い。一番近い色で薄墨に近いグレイまでだ。

「気になってたんだけど、この星には無いみたいだね。フィユも知らなかったし」

まあ、なくていいんだあんな夜の色。全部塗り潰す、汚い色なんて。そう呟くと、フィユが不意に私の頬に両手を伸ばした。

ここにあるよ。

フードを外して、あなたは私の瞳を覗き込んだ。レイの目は、クロ色。前に教えてくれたよ。そのことは全く頭から抜けていて、少し動揺した。呆然とする私の耳に、あなたの続けた台詞が真っ直ぐに響く。

ヨルがこの色をしているなら、きつととても綺麗だ。

「きれいなんかじゃない！」

強い拒絶が口をついて出て、自分でもびくりとなる。フィユが驚いた顔で固まっているのを見て、謝らなきゃ、と思うのに意思と裏腹に言葉が止まらない。握り込んだ手首に、三日月の跡を残して爪が食い込む。頭に霧がかかっている、溢れ出していくのが制御できなくて怖い。ぐちゃぐちゃになった言葉が、途切れ途切れに落ちていく。

戻りたくなんかないんだ。ずっとこの優しい星にいたい。夜は息が出なくなると。心臓が痛んで、不安感で頭がぐらぐら揺られて吐きそうになって、部屋の隅で丸まって頭抱えてたんだ。

あの星は私にとっていつも夜で。

丸い粒があなたの人差し指の背に伝って、光を一瞬だけ映して、重力に引かれて落ちた。

「もう、夜はいやだよ。独りはやだよ。だけど私、私がこんな星にいいいわけがない。世界が綺麗で、あなたが優しく、でももう。」

「もう、差し伸べられた手を、握り返すことすら出来ない」
私は、この宇宙のどこにも居場所がない。

涙が、ぼろぼろと重力に引かれて落ちていく。濡れた黒の鉱石が砕けるように。絶え間なく散る光の反射。

あなたが繋いだ手を放した。

目を閉じて喉の奥で呟く。あなたはこんなに優しく、それをうけとめることすら出来ない私だ。見放されて手を離されて、それでいい。心臓が痛いのは、我慢するから、だから。

「レイ」
とん。

覚えのある感覚とともに、私は草の上に倒され。急なことに混乱して、私の上のあなたを見上げて。

あなたの光は濡れていた。ぼろぼろと零れるあなたの雫が、私の涙のように頬に落ちて伝った。

「レイはきれいだよ」

でも、レイが自分の事をそう思っていないのも、知ってる。きみがそう言うなら、きみの言葉を否定したくなかった。それでも。

それでも、やっぱり。

光の破片をぶちまけたような煌き。あなたの瞳が真っ直ぐ私を射抜いて、ちかちかと濡れて瞬いた。両手が伸ばされて、私の両手にゆっくりと重なる。

おねがい、レイ。独りにならないで。手を繋いで。目を合わせて。

「それがレイにとってほんとうに難しいって、知ってるよ。分かり合う

ことは痛くて、目を合わせることは、『ラブシイ』んだとしても」

わたし、もういろんなことを知ってるの。きみのやさしさも、すばらしさも、知ったの。きみが好きになった。だからきみがきみを傷つけるのが、いやだよ。きみにしあわせになってほしいの。

きみがだいじだっことを、きみにつたえたいんだよ。

そしてあなたは瞳を舞う光を操って、徐々に彩度を下げた。私は呆然と目を見開いたままでいた。ぼろぼろと勝手に零れる涙で目が霞むのも、気にならなかった。

レイ。あなたは私の名前を呼ぶ。

わたしは、きみのことをみてるよ。

そう祈るように呟いたあなたの白い髪が見上げた頭上で柔らかく揺れた。永遠のように感じる時間の中で、眩しくて、心臓が痛んでも、目を逸らさずに。

そうしたら、あなたの眼に映る私の黒い瞳が、まるで夜空のようで。

あなたの放つ光がちかちかと瞬いて、それはこの星では見えないはずの満天の星空のようで。それは本当に信じられないぐらいに綺麗だったから。私は擦れた声で口を開いていた。

「……ほしが」

星が好きだったんだ、昔。お父さんがよく天文台に連れてってくれて。たまに一緒に夜更かししたりなんかして、いろんなことを教えてもらった。夜空の星の一つ一つを好きだった。

でも、優しい両親は私を残して早くにいなくなって。話す友人はいたけれど、みんな私以外に親友がいて、私はただの友達だった。不慮の事故と、純粹な人間関係だ。本当に、悪意なんてどこにもなくて。

でも無関心は悪意より痛かったんだよ。

誰も責める事なんてできなくて、ただ、お互いにお互いのことを思い

合ってる誰かを見て。

いいなあ、ってただそれだけを思ってたんだ。

誰かに優しい言葉で、ここにいる事とか、その人の隣にいる事とかを、認められてみたいなあ、って願ってたんだ。

そんなの、子供っぽい我儘だ。

でも。

「たぶん人は、名前を呼んでくれる誰かがいないと、認めてくれる誰かがいないと生きてけないんだ。

あなたの目を見つめて、やっと分かった、と泣きながら笑った。

見てみない振りして無理矢理生きてたら、いつのまにか夜になると上手く息が出来なくなった。夜は静かで、暗くて、言葉がよく頭の中を回る時間だったから。暗闇にいると過呼吸を起こす様になって、毎日夜が来るのに怯えるようになった。星が好きだってことだけは、大事に持っていたかったのに。何も持っていない私は、唯一貫ったそれだけは、失くしたくなかったのに。見上げた空に星が無かったらと思うと怖くなって、夜空を見れなくなった。人の目に自分が写っていないのを認めるのが怖くなって、夜の中丸まって目を閉じてた。

「ほんとは、きつと星はあったんだと思う。瞼の裏の真つ暗な夜空を、こわがってただけで」

目を開けたら、きつと案外すぐそばに私を見てくれる人は居たのかもしれない。独り善がりやで、伸べられた手に背を向けて蹲って、誰も見えない、って泣いていた。

まずは向き合わなきや、愛されるわけないんだ。

私とフィユはお互いの目にお互いの光を反射させて、星が引力で引かれ合うように右手と左手の、左手と右手の指を絡めた。

「フィユ、きいて」

「『夜』は、ほんとはとても美しいんだよ」

ほんとは、あの星の夜が、好きだったんだ。

どこで間違えてしまったんだろう。

「間違えてなんかないよ」

あなたはそう言って微笑んだ。

「誰も悪くなかったんだよね」

なら、レイも悪いわけじゃないよ。レイは、何も間違えてなんかないよ。向き合おう、って足掻いたから、レイはこの星に来たんだよ。

「はなれるのはさびしいけど、でもこうなるのはわかった。レイは空を見るとき、いつもさびしそうな顔だったから。きみには、好きな景色をみてほしいから」

もう大丈夫だね。絶対、大丈夫だよ。きみみたいな人は、その星でも愛されないわけじゃないよ。あなたが微笑むと同時に、あの時の感覚がまた訪れた。体が浮き上がるような感覚。あなたと固く繋いだ指先が透明に薄れ始める。あなたの掌の光が私の手を透かした。

「フィユ」

涙の粒が宙に浮く。白い外套が捲れあがって、光を孕んだ。視界の全てがきらきらと瞬いていた。

「この星では見えないからわからないと思うけど」

「あの星には、数えきれないほどの星空が広がるんだ」

「きつとその中にこの星もあるから」

いつか探してみせるから。

そう言って、手に力を込めた。透けていたけれど、不器用な握り方だったけれど、もう手は震えていなかった。

今度は、私があなたの手を引くから。

その言葉にあなたは驚いたように目を見開いて、そしてゆっくりと目を細めて、溶けるように笑った。ほんとうに、しあわせそうに、笑った。意識が徐々に薄れる。

消え始めた体で、呟く。

フィユ、あなたがしてくれたことはありがとう、って何回言っても足りない。伝えたいことがまだ、抱えきれないぐらいあるんだ。

「だから、さよならじゃなくて」
またね。

そう言うと霞む視界の先であなたの口が同じ形に動いたのが見えて。

私は光の中で穏やかに笑い返して、目を閉じた。

酸素も光もあなたがくれた。真空の宇宙だって星の無い夜だってもう息が出来そうだ。ちゃんと向き合っていけそうだ。

いつか大事なものを見つけて、夜でも光があるようになる。

そうしたらあなたを迎えに行くね。

いつかあなたに夜を見せるから。

それはとても綺麗だから。

銀河の果てで、待っていて。

目が合う

愛知県立刈谷北高等学校 二年

北野友理

きみと目が合った

私はあなたの目を見ている

きみは私の目のあたりを見ている

でも きみは 本当はどこを見ているのだろうか

きみは何を見ているのだろうか

私の目だろうか

私の目にかかった髪だろうか

それとも、私の目に映っているきみ自身を

みているのだろうか

もしくは、私の心の中を 読もうとしているのだろうか

ひよっとして私の後ろにある景色を想像して眺めている
のだろうか。

もしかしたら 私なんて眼中になくて

この世界の ずっとずっと先の

小さな小さなまばゆい星と

見つめあって 愛し合っているのだろうか

きみと目が合った

……かもしれない

短歌部門【第一席】

オレンジの空が悲しい幼子ら溜めた涙に友の面影

玉虫のようにきらめく恋心君に見えてる私何色

聞き飽きた言葉の重み軽くてき疲れた僕に埃舞い散る

愛知県立常滑高等学校 一年 石塚江莉奈

俳句部門【第一席】

孤独ぢやないでせうに桜葉がふる

秋晴やシヨートはそこら辺にをれ

ましろなる箸置きの裏素十の忌

名古屋高等学校 二年

難
波
朔
矢

